

柔構造の先賢

周布政之助 (一八三三—一六四)

(2)



出生と初任官

政之助は萩にて出生した。父は吉左衛門母は竹といった。五男で出生三ヶ月後に父は歿し、長兄五郎左衛門兼親が家督を藩政府に請願した。所が允許を受ける前に長兄も亦翌月歿してつた。長兄は前途有為の青年で吟稿が二巻残っているという。次男、三男は他家を継ぎ四男は早生姉も亦他家へ嫁いでつた。

赤坊の政之助に家督を継承させる様藩政府に請うた。所が当時は嫡嗣(いふなれば長男の後継ぎ)を得なければ禄高を半分にするという規制があり、百五十一石が六十八石に減少させられて、文政六年九月二九日(一八二三)周布家の当主となつた。

八歳の時習字読書を学び、のち天保九年(一八三八)藩学明倫館に入学した。藩主敬親公が初めて江戸より萩城に帰国した時、館の優秀生として御前講演を行い、その学問に熱心であることを嘉賞された。其後藩の自随諸生(特待生—優秀なものは寄宿舎に無料で生活させる)となり、遂には館廟司を命ぜられた。廟司とは館の中に祀つた先聖の廟を御守する役目で、最優秀生がその務めを行うのであつた。

館で学ぶこと八年藩で登用されることになり、弘化四年九月(一八四七)蔵元検使暫役になつた。年二五歳、この喜びを政之助は村田清風に喜んで報告した手紙がある。

註蔵元検使役とは、米方救米方作事方受銀方拂銀方の諸局があるのを常に是等

を巡視して、銀穀物品等の出納を検閲することを掌どり、暫役とは仮役で補助者である。

幼児より家庭には独り慈母竹のみであつたが、大変賢明で養育には心を使われ、その成果が後年の政之助の人間形成に大いにあずかつて力となつた。

斉藤 元宣

文芸

清風句会

〔三光〕

天 竹の子の衣からげし足揃う

ひで

並んで生えた筍が、一、二枚竹の皮を脱いで、青々した足を揃えた所、着物のすそをからげた様な表現が面白い。

地 山内に迫る轡気や鯉職

元

山内に迫って来る青々とした山の氣に鯉職の色がよく映える。氣迫もある。

人

帰り来し子が間に合ひし豆御飯

ゆか

帰り来る子に喰べさせようと炊いた豆の御飯の、未だ温いうちにやと問に合つて安心した母性の心。

〔五客〕

泊り船舳先に泳ぐ鯉のぼり

千代

子が贈る鱗落しや母の日に

茂子

錦鯉水田深くおよぎけり

さつき

草笛の子等にまじりて吹いて見る野いちごやかくれいし実の大いなる

信子

〔七賢〕

鯉職大漁職あえの里

旬一

松の芽のみな天を指し晴れつづく

兎史

夏柑の薫り土塀に染まりけり

梅雪

家中に木の芽香りし夕飯かな

ひで

点々とのぼり流るゝ山家かな

よし子

夏柑の香りも入れて封書とじ

茂子

手を上げて別れも楽し若き日は

ゆか

〔十哲〕

夫の留守一人ぼっちの臘月

ひで

鯉の池替えて端午も済みにけり

ゆか

この色がつゝじならではと感に堪え

ゆか

葉桜や城跡これより老二

元

孫追うて下りて行く姑木の芽坂

茂子

蠅打や昔をしのび朱呂で編む

梅雪

浮草の中に蛙の顔があり

信子

剪み込みし庭整いて夏に入る

旬一

織ばた家紋に誇示したり

兎史

薫風や渚つたいに朝散歩

千代

選者 吉村隅川先生

